

平成 24 年度教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	管 24K01	氏 名	荒井 裕美
研究主題 —副主題—	思考力、判断力、実践力を高め、自発的・自治的な活動につなげる指導の工夫 —学級活動（話し合い活動）を中心として、学級会活動と児童会活動の関連を図る指導—		
所属校	町田市立南第一小学校	派遣先	創価大学 教職大学院

項 目	内 容
I 研究の目的	<p>特別活動は、「生活を創る」ことを目的とする固有の教育活動であり、学校での多様な生活体験が児童・生徒の個性や主体性、人間性や社会性の育成に結びついていく。学校段階や発達段階、活動内容などに応じて、でき得る限り児童・生徒の自発的・自治的な活動、自主的・実践的な活動を引き出し、自ら豊かな学級・学年・学校生活を創り出す営みを充実することが何よりも重要である。</p> <p>つまり、よりよい生活や人間関係を築くための諸活動の充実を、子供自らが創意工夫し、学級・学年・学校全体に投げかけていくことである。</p> <p>特別活動における自治的な活動における自ら学ぶ子供について、教科との違いで言えば、その教科で教えるべき内容に即して子供たちが自ら学ぶのに対し、特別活動は、子供が「なすべきこと自体」を自分たちで決めて、その実現を目指して自主的、実践的に活動に取り組むというところである。いわば、教師が定めたゴールに向かい、教師が敷いたレールを子供が自ら走るというよりも、子供たちがゴールや進むべき道を見定め、自分たちがゴールや進むべき道を見定め、自分たちでハードルを立て、それを協力しながら一つ一つ乗り越えながら走りきるというような自主的、実践的な意欲や態度である。</p> <p>そこで、子供たち一人一人が努力と協力を繰り返しながらより良い生活を築こうとする plan（話し合い・集団決定や自己決定）、do（実行）、check（振り返り）、action（改善）の活動過程を力強く歩んでいけるような意欲や態度を育成する必要があると考えた。plan（話し合い・集団決定や自己決定）の前段階としての standing（発起する・自ら立ち上がる）という意欲を高める事前指導を大事にする必要がある。特に、生活上の諸問題への関心を高めること、生活上の諸問題を感じる心、発見する目などを育てることが重要であると考えた。</p> <p>上記のような力を育てるために、自分たちで乗り越えていくハードルを立てる方法を、子供に教えるのではなく、気がつかせる指導が必要であると考えた。「活動の流れの中で育つ力」における「課題を発見する力」「計画力」を伸ばすことが大事だと考えた。その手だてとして、子供一人一人は、学級、学年、学校の一員であることを意識させ、学校の一員として、自分たちの生活を作り出すことへ、目を向けるような子供用学級会ハンドブック作成を試みた。</p>
II 研究の方法	<p>教育課題実地研究にて、国立大学法人奈良女子大附属小学校で昭和 23 年から行っている「なかよし」を見学し、学んだ。</p> <p>また、教師用学級会ハンドブックや、様々な子供用ワークシート集の分析を行った。</p> <p>教師用学級会ハンドブックでは、3自治体の小学校教育研究会にて作成しているハンドブック、「学級会早わかり」（小学館教育技術 MOOK COMPACT64 シリーズ）、「小学校学級活動のファックス資料集楽しい活動を生み出す改訂対応」（低学年・中学年・高学年、明治図書出版）、「横浜版学習指導要領特別活動編」の 4 冊を分析した。</p> <p>子供用ワークシート集では、「心のノート」、「Hi, friends! 1, 2」の 2 冊を分析した。</p> <p>分析した内容をもとに、子供用学級会ハンドブック（中学年用）の一部を作成した。</p>

<p>III 研究の結果</p>	<p>「学校＝勉強するところ」と、多くの子供が思っているが、学校で学ぶ内容は教科学習だけではない。学校は人間関係や、社会性を学ぶ大事な場である。学校や学級を子供たちにとっての「社会」にしていく必要がある、その社会の一員として、子供たちが自主的に話し合い、考え、判断し、協力しながらよりよい生活や人間関係をつくっていけるようにすることが大事であると考えた。学校とはどんな場所か、学校生活を自分たちで変えていけることを知らせる内容が必要ではないかと考えた。さらに、子供に見通しをもたせるために、1年間の学校生活（長期的見通し）、1日の学校生活（短期的見通し）の頁も作成した。「こんなふうにやってみたい」という憧れや希望を見出せるようなものとした。</p> <p>また、学校生活を充実したものにするためには、学級づくりが欠かせない。「学級」は子供たちにとって、学ぶ場であり、生活する場でもある。子供の学校生活を充実させるためには、学級集団としての人間関係が一番の基盤となる。よりよい人間関係を築くことができるようにするために、学級集団で一丸となって進んでいくための指標として、学級目標を設定することが重要となる。子供個人が学級集団の一員であることを感じられるように、子供自身の思いが込められた学級目標を設定することも大切である。一人ひとりの学級への思いを子供にもたせるために、心のノートを参考にし、学級目標や、個人の目標を書き込めるような内容を作成することにした。</p> <p>学校において、多様な人と一緒に同じ目標をもって活動することが乏しくなり、想像力を働かせて周りの人の心の中を推測しながら、言葉かけなどに配慮して人間関係を作っていくことができなくなっている。多様な対人関係の体験を学校の中でどのように作り出していくかが大きな課題になっている。現在の子供たちは、自分のペースに合わせてくれる大人との付き合いしか経験していない。体験は学校のカリキュラムでもできるが、高齢者から乳幼児まで、あるいは保護者ではない「斜めの関係」の大人との接点は、学校外で得られるケースが多い。より多くの人とのかかわりをもたせられるように、地域の人との関わりの項目を設定し、子供に着目させる工夫とした。また、学級会の議題として、「児童に任せることのできない条件」とされる内容が、『学習指導要領解説特別活動編』に示されている。この点を押さえなければ、子供が「自治的」を通り越し、「自治」の範疇まで踏み込み、学校のルールを揺るがすことになる。子供の自治的範囲外を押さえる項目も必要である。</p> <p>最後に、話し合い活動で決定したことを、学校や地域に広めるための方法も、子供たちに伝えていきたいスキルである。基本的なマナーやモラルについて、座学や大人からこうしなさいと言われても、子供はあまり聞いていないか、すぐに忘れてしまう。子供には、自らが行動する側に立てるような実体験を通じて、学んでもらうことが大切である。その時の手助けになるような内容とした。</p>
<p>IV 考察</p>	<p>中学年用のハンドブックを、サンプルとして数頁作成してみた。目次に表した他のテーマについても作成していくことが今後の課題である。子供用ハンドブックとして作成したものが、子供たちにどのような効果があるのかについての検討もしていかなければならない。また、興味関心の違いや発達段階、学校生活の役割をもつことが多くなることなどを踏まえて、高学年用のハンドブックを作成していきたい。</p> <p>また、子供用ハンドブックを、子供へただ渡せばよいわけではない。子供たちが、より活発にハンドブックを活用するためには、子供たちの生活の中で何かきっかけがなければならぬ。そのきっかけを作るのは、教師に他ならない。そのためには、子供用ハンドブックを子供へ提示するための指導計画が必要である。子供用ハンドブック作成とともに、作成していかなければならない。</p>